

ウサギの目って、どう違うの？ 目の病気

目は心の窓。見ているも見えないこともあります。ウサギの目、ときどき見つめてくださいね。

ウサギの目は赤いと言いますが、白いウサギの目だけが赤く見えるのです。虹彩（瞳の周囲のしぼりの役目をする部分）に色素がないため、赤い血管が直接見えるので、白いウサギ以外は黒い目をしています。

人と違って、ウサギにはイヌやネコのように瞬膜（第3眼瞼）があり、目の表面を保護する役目を持っています。まばたきの回数も少ないのです。

また、ウサギは夜行性で、目は暗くても見える仕組みになっています。

目が顔の正面についている動物（シマウマ・キリンなどの草食獣）と、側面（横）についている動物（ライオン・トラ・イヌなどの肉食獣）がいますが、ウサギは側面に突出するようにしています。草食動物であるウサギは、襲われる立場にあるので、敵をすぐ発見できるように、ほとんど360度の広い視野を持っています。視神経の集まった中心野が帯状になって、幅の広い範囲で物が見えるようになっています。

涙の排水口ともいえる涙点は、他の動物は上下のまぶたのそれぞれにあります。ウサギの場合は、瞬膜の根元に1つあるだけです。

ウサギのもうひとつの特徴は、鼻涙管（涙が鼻に流れる管）です。1つは涙点からはじまり、通路が曲がりくねっているため、流れにくく、つまりやすい構造になっています。その上、この管が切歯の長い歯根（歯の根元）の近くを走っているため、歯の障害があると、鼻涙管が閉塞する比率が高くなります。

目の病気と原因

1) 結膜の病気

眼球の白目の部分と、まぶたの内側の部分は結膜で、炎症を起こした状態が結膜炎です。

結膜炎は、パステラマルトシダやブドウ球菌などの細菌が増えてなることが多いです。糞尿から発生する高濃度のアンモニア・敷物の異物（木のチップ・乾し草から出るホコリなど）・逆さまつげ・臼歯の不正咬合が原因となることもあります。

また、結膜異常伸長といって、結膜がどんどん伸びて角膜を覆ってしまうことがあります。原因はよくわかっていません。

2) 角膜の病気

目の表面の角膜に傷が付き、細菌が増えると角膜炎になり、潰瘍になることもあります。涙の分泌が少なくて起きる乾性角膜炎（ドライアイ）にもなります。角膜にコレステロールや脂質を取り込んでしまう脂質角膜炎では、白い斑点として見られます。

3) 鼻涙管の閉塞及び涙のう炎

涙の通り道である涙のうで細菌の感染が起きると、目ヤニが多くなります。鼻涙管が閉塞すると、涙が多くなります。慢性の結膜炎・角膜炎や歯根の異常などが原因となります。

4) 白内障

レンズの働きをする水晶体が混濁する病気です。微孢子虫であるエンセファリトゾーンが原因となることがあります。

5) 眼瞼異常

遺伝や感染の後遺症で、まぶたが内側や外側にまくれていることがあり、角膜炎や結膜炎が起こりやすくなります。

6) 眼球内感染症

パスツレラなどの細菌が、眼球内に侵入して起きます。

7) 緑内障

眼球内の圧力が高くなる病気で、目が突出してきます(牛眼)。劣性遺伝子により、ニュージランド・ホワイトに多いと言われています。

8) 眼球後膿瘍

眼窩(眼球の奥)に膿がたまるため、目が突出してきます。ほとんどは、臼歯の歯根部の病気と関連しています。臼歯の歯根感染が起きると、眼球後部に膿がたまります。

目の病気の症状と予防法

1) 結膜の病気

まぶたが腫れる・充血して赤くなる・涙が多く毛が濡れている・目ヤニが出る・まぶしそうにしている、などの症状が見られます。

慢性化すると、涙があふれていつも濡れるため、目の下が赤くなったり毛が抜けたりします。ウサギ自身が汚れを取ろうと前の両足で顔をこするので、両前肢の内側の毛が汚れてゴワゴワになっていることもあります。

予防は、アンモニアの発生を防ぎ、刺激となるような敷材を避け、臼歯のチェック・環境の改善(多頭飼育・食餌のバランス・敷物・すきま風・トイレ・ブラッシング)など、結膜炎が起こりにくい状況を保つことです。

2) 角膜炎

目が痛いので、ショボショボさせたり、つぶったりします。涙も多く出ます。目が白く濁り、結膜（白目）が充血したりもします。進行すると、角膜潰瘍となりますので、早めに治療を受けましょう。

予防は、目をぶついたり傷つけたりしないようにします。涙の分泌が少ない場合は、それを促す治療をしたり、人工的に涙を補ったりします。

3) 鼻涙管の閉塞及び涙のう炎

鼻涙管が閉塞するので、下まぶたを下から上に向かって圧迫すると、涙点から白い涙が出てきます。目の下の毛が、涙や分泌物で固まって、ゴワゴワしていることもあります。

予防は、細菌感染があれば早めに治療し、乾し草を多く与えて、臼歯の病気を少しでも防ぐようにすることです。

4) 白内障

水晶体（レンズ）が白く濁るために、光が通りにくくなり、視力が失われていきます。バランスの摂れた食餌を与えましょう。微孢子虫にも気をつけましょう。

5) 眼瞼異常

まぶたが内側にまくれていると逆さまつげの状態になりますので、角膜炎や結膜炎が起き、赤くなったり、涙や目ヤニが出たりします。手術が必要なこともあります。

予防は、目ヤニや涙が多いときは早めに治療し、二次的な障害を引き起こさないようにすることです。

6) 眼球内感染症

目の中に白い膿が浮かんでいたり、結膜が充血したり、角膜が濁ったりします。

予防のために、感染に注意して、日々の生活環境を整え、免疫力をつけましょう。

7) 緑内障

結膜の充血・角膜が白い・瞳孔の反応がにぶい・目が大きくなるなどの症状が見られません。

劣性の遺伝子を持つウサギは、繁殖に用いないようにし、気になることがあれば早めに病院へ行きましょう。

8) 眼球後膿瘍

目が飛び出しているときは、目の病気だけでなく、歯が原因のことが多いので、食餌に気をつけ（乾し草中心）膿瘍の予防に心がけましょう。臼歯の不成咬合などは早めに治療します。

キャンペーン

只今、私たちの病院はキャンペーン中です。何のキャンペーンかという、「ウサギの血液検査をもっとやろうよ」です。

血液検査は、イヌやネコではかなり定着してきています。特にイヌは、春のフィラリアの検査のときに、「先生、ついでにいろいろ調べて。この子、口きかないから心配だし。年1回くらいは飼い主の義務みたいなもんよね」と、頼まれることが多くなりました。

ネコでもワクチンのときにおすすめしますと、「そうよね。1年365日、楽しませてくれてるんだもんね」。調べてみると、慢性腎不全になりかかっていたり、肝臓の数値が高かったりすることがあります。病気になってからでは調べるのではなく、予防で普段から正常値を知っておこう、というわけです。

ウサギも……と思うのですが、これがけっこう大さわぎ。気が小さくてデリケート。それなのにおこりん坊なので、ここぞというときに動いてしまうのです。「だからちょっとねー」と、必要性はわかっているけども、尻込みしている友達もいます。

でも、ウサギは、イヌやネコに比べると、病気の症状をつかみにくい動物なので、逆に血液検査もできると、手探り状態から少し方向が見えることもあるのです。

私たちの病院では、座布団カバーにウサギをすっぽり入れて、前趾で血液を採ります。ここでうまく採れない場合は、耳の静脈を使います。血管が細くて採れないときは、ホカロンやマッサージで温めます。暖かいと血液の流れがよくなって、血管がふくらんでくるのです。寒い日に来院したウサギは、しばらく暖かい場所に移動させます。寒いと、末梢血管が細くなっていることが多いからです。

血液検査をしたからといって、ズバリ病名がわかると思ったら大間違い。検査がすべてではないので、わかる病気ばかりではありません。でも少なくとも、今、このウサギがどういう状態にあるのかな、ということはわかります。

貧血や黄疸がないか・細菌が増えていないか・脱水はあるか・肝臓や腎臓の働きはどうか・尿毒症になっていないか・血糖値は……など、ほんの少しの血液に、けっこうたくさん情報が詰まっているのです。

元気そうに見せていても、かなり具合が悪かったり、日頃からそのウサギの正常値がわかっていると、小さな変化が早くわかったり、診断も治療もちょっと違ってきます。注射は、イヌやネコより細い針を使うので大丈夫。気になることがあったらおすすめします。